

国際火山防災シンポジウム Cities On Volcanoes 3 に参加して 1

安養寺信夫*

1 火山の上の都市

シティーズ・オン・ボルケーノズ

火山噴火は歴史の中ではいくつかの都市の興亡に関与し、現在でも脅威を与え続けている。火山防災を主題にした本シンポジウムは、都市に及ぶ火山活動の影響を討議すべく自然災害対策にたずさわる専門家のために企画された会議である。そのためテーマとセッションは意識的に多分野にわたるよう企画され、集まった研究者や実務者が共通の課題を分かち合うよう配慮されている。

このシンポジウム自体は、火山噴火時の緊急対応における都市・地方計画、教育、火山学、社会学と心理学についての協同作業を一般化し展開することを目的としている。この会議は国際火山・地球内部化学協会IAVCEIが主導し、今回はアメリカ地質調査所やハワイ大学、ハワイ州防災局などが全面的に支援して開催に至った。第1回は1998年にローマとナポリで開催され、第2回は2000年にニュージーランドのオークランドで開催されてきた。とくに定期的に開かれているわけではないが、2～3年ごとの開催を目処としているようである。

わが国は世界有数の火山国として、また火山学研究の先進国の一つとして期待されている。最近は大

山研究者の中からも火山防災に対する取り組みもみられるようになった。当センターは火山砂防の一環として、ここ数年火山防災全般にわたるさまざまな調査研究を実施している。今回は最近の研究成果を発表するとともに、他国の研究者や防災担当者らとの意見交換を図るべく当センターからも職員を派遣した。

2 会議の概要

会議は2003年7月14日～18日の間、ハワイのヒロ市にあるハワイ大学ヒロ校において開催された。主催国アメリカをはじめ、日本、イタリア、ニュージーランドが多数を占め、オセアニア、東南アジア、中南米、ヨーロッパ、アフリカなど約30ヶ国からの総数約330人の参加であった。参加者の所属は、火山研究者はもとより、防災行政担当者、教育関係者、エンジニア、社会学者、医療関係者、国立公園管理者など多岐にわたり、このシンポジウムの性格をよく表していた。

研究発表テーマも危機管理としての地域社会の問題や備え、対応、災害の評価方法、観測技術などの科学、火山と健康などに分けられ、口頭発表132件、ポスター発表155件という盛況であった。またシン



援助と教育ワークショップのひとつ
(子供たちに教える噴火のジェスチャーを参加者に実演してもらっている)



ポスターセッションにて大人気の
立体模型ハザードマップ



現地見学会(キラウエアから流れ出した
溶岩によって遮断された道路付近での説明)

* (財)砂防・地すべり技術センター総合防災部次長

ポジウムの前後にはワークショップが設けられ、内容もハワイに密接な溶岩流対策、火山調査の新技術、援助と教育という興味あるテーマであった。シンポジウムの中間日には現地視察が企画され、キラウエア山頂コース、ハワイ島南西海岸コース（1983-2002噴火の溶岩で覆われた地域）、コナ海岸コースが用意されていた。

当センターからは安養寺が富士山ハザードマップの基図に関する話題2件、吉田真也主任技師が同じく被害想定について、伊藤英之課長代理らが十勝岳の火山防災と火山ハザードマップの公表後の住民説明などについてそれぞれ口頭とポスターで発表した。

シンポジウムは朝8時半から発表が始まり、コーヒープレイクと昼食を挟んで、夕方まで続き、夜は7時半から9時半頃までレクチャーが行われるというハードスケジュールであった。2日目の夜には荒牧重雄先生によるレクチャーもあった。参加者は疲れをみせる様子もなく、熱心に聴き入っていた。

3 トピックス

日本からの参加者は大学・研究機関が多かったが、今回は当センターをはじめコンサルタントから

も参加があり、とくに砂防関係者は初めてということで、砂防のことを聞きたいと直接コンタクトを取ってくる他国の参加者もいた。また、有珠山で防災教育のための資料を作成した地元小中学校の先生方も参加されたことは画期的であった。

開催地がハワイ島であることから、1983年から続いているキラウエア火山ブー・オウオウとクパイアナハ噴火に関する話題が盛り込まれていた。オープニングでは火山の女神ペレへのオマージュで始まり、この噴火による溶岩流による埋没で伝統的な村を失ったカラパナの旧住民による追憶で結ばれるというようなセッティングであった。桜島や有珠山のような爆発的噴火に比べて、静かな噴火と思われがちなハワイの噴火であるが、20年もの間に22億立方メートルの溶岩を噴出し、42平方キロメートルの地域を溶岩で覆ってしまった自然の力と、そこに生活する人間の問題について考えさせられる話題であった。

今回はエクアドルのキトに決まったが、期日は今後調整される予定である。

末尾ながら多忙な中で1週間の不在をサポートしていただいた理事長、専務理事、総合防災部の皆様に感謝申し上げます。



口頭発表中の筆者



ディケンズの二都物語 (Tale of Two Cities) をもじって "Tale of three eruptions" というタイトルで講演中の荒牧先生 (隣はアメリカ地質調査所ハワイ火山観測所のスワンソン所長)



ディナーのアトラクション (地元の子供たちによるハワイアン・ダンス、バックは高校生バンド)



結びのプログラム (溶岩で村を失ったカラパナの住民による体験談)